

鹿児島のシギ・チドリ

「シギ」や「チドリ」はともに、水田や干潟、海岸などの水環境で生息します。そのため、シギ・チドリ類としてまとめて扱われます。野鳥愛好家たちは、このシギ・チドリ類を“シギチ”と略して呼ぶことが多く、春と秋の渡りの季節には、これらを探し回ります。今回は、このシギ・チドリ類について紹介したいと思います。

シギ・チドリ類とは

シギ・チドリ類は、分類学的に明確に定義されたものでなく、チドリ目の7科に入る種を指します。

その多くが繁殖と越冬のために極北地域(ロシア・アラスカなど)からアジア・オーストラリア地域を往復する途中で日本に立ち寄る旅鳥で、春と秋の渡りの季節に日本へ飛来します。

シギとチドリは、地味な色、長い胴体など共通点も多いため区別しにくいですが、観察してみると、違う点もあることに気づきます。例えば、くちばしの長さは、シギは長く、チドリは短いです。また、採餌行動は、シギは、歩きながら、常にくちばしで地面や水たまりをつつき、餌を探すのに対して、チドリは、立ち止まっては歩くを繰り返す、餌を探します。野外においては、このような違いを押しやることで、シギとチドリを区別できます。

次に、今年観察できた“シギチ”の一部を紹介したいと思います。

今秋話題になった「セイタカシギ」

今秋は、「水辺の貴婦人」と呼ばれるセイタカシギの県内への飛来が話題になりました。



大きな群れで飛来したことや、これまで見るこ

うなかった水辺で観察されたことから、ニュースとなったようです。

今から40年ほど前には珍しい鳥でしたが、現在では、春と秋に全国で見ることができます。(写真は、9月にいちき串木野市八房川河口近くで撮影)

最も身近なシギ「イソシギ」

県内の河川や湿地でよく見られるシギの仲間です。尾羽を活発に振りながら活発に歩き回り



ます。胸の脇に白色の食い込みがあるのが特徴です。(写真は10月に阿久根市大川島で撮影)

乾燥地を好む「ムナグロ」

夏羽の胸の部分が黒色になっており、それが名前の由来になっているチドリ



の仲間です。水が貯まった場所よりやや乾いた場所を好む傾向にあります。(写真は4月に出水市西干拓地にて撮影)

水田に潜む「タシギ」

水田や草原に潜み、海辺には出てこないシギの仲間です。(写真は10月に薩摩川内市で撮影)

